

ろう者と聴者の行動様式の違いに関する調査研究

岡本 聡子

I 問題と目的

ろう者は人を呼ぶときに後ろから肩をたたいたり物を投げたりするなど、聞こえないことを補う代替手段として行っている、ろう者特有の行動をすることがある。これらはろう者の間ではごく普通の行動であるにもかかわらず、聴者の間では非常識とか失礼なことに当たるものもある。そのような場合、ろう者は聴者から誤解されたり注意されたりするが、神田(2000)が言うように「聴者社会で働くろう者は、多数者と少数者という力関係が作用することが原因で、不満が聴者に言いづらい」現状があり、ろう者にとって当たり前の行動を聴者から注意された時、自分が悪かったという受け止め方をし、我慢をすることが多いようだ。このような問題を解決する方法の一つとしてろう者と聴者の行動様式の違いを明らかにし、互いに理解し合うことが考えられる。しかし、ろう者の行動様式を調査し、分析した研究はほとんど行われていない。

そこで本研究は、聴者の間では非常識や失礼にあたり、ろう者に対する誤解や批判の対象となるようなろう者の行動様式をアンケート調査で明らかにすること、自由記述から得られるろう者の経験談や意見などからろう者の考えや思いを明らかにすること、それらの結果からこの問題に対する解決策を検討することを目的とした。

II 方法

まず、ろう者の経験談が掲載されている書籍や関連のある先行研究より「ろう者の行動様式」について情報収集をし、それをもとに質問項目を暫定的に設定した。そして、予備調査を行って本調査に使用する質問項目等を決定し、アンケート調査用紙を作成した。なお本研究の対象者は、インテグレーション経験がある場合には、社会に出る前に聴者の行動を身に付けており、社会に出た時に行動の違いが挙げられなくなること・社会に出て3年以上経験があれば、ろう者の行動と聴者の行動の両方が分かっている（対処方法も分かって

いる）と考えられたことから、「インテグレーション経験のない聾学校卒業者で、且つ、3年以上聴者と働いている者」とした。

III 結果と考察

1 質問項目

予備調査の結果をもとに、28の質問項目を設定した。内訳は①フェイスシート（10項目）、②聞こえないことが原因で起こる行動様式の違いについて（14項目）、③聾学校で指導すべき事項に関すること（2項目）、④インテグレーション経験の有無について（2項目）である。本調査は2006年8月に実施した。

2 対象者の属性

前述の条件を満たすろう者54名から有効回答を得た。対象者の内訳は男性26名、女性28名で、年齢は21歳から62歳であり平均年齢は36.5歳であった。職種は製造業18名と事務9名が抜き出て多く、他は軽作業3名、技術職2名など多岐にわたっていた。対象者の約半数が仕事に補聴器を使用しておらず、職場での聴者とのコミュニケーションには筆談が最も多く用いられている。

3 主な結果と考察

1) 注意や誤解を受けたこと・困ったことがあること

表1 注意や誤解を受けたことの有無

項目	有	無
「口形の似ている言葉について」	31(57.4%)	23(42.6%)
「視線に関すること」	12(22.2%)	40(74.1%)
「食事のマナーについて」	12(22.2%)	42(77.8%)
「職場での飲み会について」	11(20.4%)	40(74.1%)
「職場での言葉使いについて」		
上司	10(17.2%)	42(77.8%)
同僚	8(14.8%)	44(81.5%)
部下	3(5.6%)	49(90.7%)
お客	6(11.1%)	44(81.5%)
「会議や商談などの 改まった場について」	5(8.6%)	25(43.1%)
「ノックの仕方について」	1(1.7%)	56(96.6%)

表2 一度でも困ったことがあるか

項目	有	無
「食事のマナーについて」	30 (55.6%)	16 (29.6%)
「ノックの仕方について」	22 (40.7%)	29 (53.7%)

(注：表1.2の数字は人数を示す)

聴者から注意や誤解を受けた行動様式には「口形の似ている言葉について（該当する回答者の割合57.4%, 以下同様）」「視線に関すること（22.2%）」「食事のマナーについて（22.2%）」「職場での飲み会について（20.4%）」があり、これら4つについて、聴者から注意や誤解を受けたことがある回答者が20%を超えた（表1）。

具体的に、「口形の似ている言葉について」は、「たまご・たばこ」という広く知られている言葉の他に、「一時・二時・七時」など時間や数字に関する言葉や、「納期・用意」などの職場で使用されることが多いと思われる言葉のほか、様々な言葉が挙げられた。聴者もろう者も時間や言葉が正しく受けとられたと思い込むために、トラブルが生じやすい。読みとり間違いをしやすい口形の似ている言葉を両者が意識することで、誤解を大幅に防ぐことができる。

「視線に関すること」とは、ろう者は相手の口の動きから話を読み取る必要があるため、相手の顔や口元を見るが、このことから聴者から「恋愛感情をもたれていると思われた」「にらんでいると思われた」などの誤解を受けたことが挙げられている。聴者が話をする相手の目を見て話すことが少ないことに、ろう者は疑問を抱くようだ。聴者の立場で考察すれば、聴者は相手の目をじっと見て話すということに慣れていない。見つめられているように感じ、恥ずかしいという感情が出てくる。互いの思いを考慮したうえで、仮にトラブルが起きた場合には自分の気持ちを伝え理解してもらうことが必要であろう。

食事のマナーについては、「音を立てて食べるなど注意された」という経験が目立った。そして職場での飲み会については、「上司より先に同僚へお酒をついでしまった」や「コミュニケーションが

足りなかった」という回答が見られた。

職場での飲み会については、注意や誤解を受けたことは無いが、飲み会自体に「参加したくない」という回答が含まれており、その理由として「聴者の中には入りづらいので、初めから飲み会を望んでいない」があった。これは飲み会の席で、聴者だけが音声言語で盛り上がると、話が分からないということが原因のように考えられる。独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構（2000）は、業務後の懇親会や飲み会などインフォーマルな付き合いも聴者ろう者の互いの理解のために有効だとしており、聴覚障害者が無理なく参加できるような配慮が必要であろう。

「困っている・困ったことがある」ものは「食事のマナーについて（55.6%）」「ノックの仕方について（40.7%）」であった（表2）。

食事のマナーやノックについても、「聴者はなぜ（食事の）音だけにこだわるのか」や「ノックをしてもその後の返事が聞こえないから困る」「ノックは聞こえる人のための行動だと思う」という意見が挙げられた。「聞こえ」が関係してくる部分であり、聴者が一方的にろう者を常識が無いなどと決め付けるのではなく、これらの気持ちを抱えながらも聴者の行動様式に合わせているろう者の気持ちを汲む必要性がうかがえる。

これらに対しては、何らかの手立てが必要なことと言える。

2) ろう者の行動様式とみなせるもの

ろう者の行動様式とみなせるものとしては、「聴者を呼ぶ方法」に違いが見られ、相手が上司であっても同僚や部下であっても、肩を叩いたり、手をヒラヒラさせたりすることで、相手に気付いてもらう方法が使われていることが分かり、特に「肩を叩く」という方法が多かった（図1）。ろう者が肩を叩く行為は、例え相手が上司や目上の人であろうと、それは失礼な行為ではなく、我々聴者が人を呼ぶ際に音声が一番使用しやすいように、ろう者にとって「肩を叩く」という行為が聞こえないことを補う、使用しやすい方法だということが分かる。特に使用する方法（図2）として「手を叩

いて音で相手に気付いてもらう」という方法が、上司に対してのみ使用するという結果となった。

＜図1.2の項目説明＞

音声：聴者を呼ぶ時、音声を使用する

手：聴者を呼ぶ時、手を叩く

机：聴者を呼ぶ時、机を叩く

肩：聴者を呼ぶ時、（相手の）肩を叩く

ヒラヒラ：聴者を呼ぶ時、手をヒラヒラさせて気付いてもらう

じっと見る：聴者を呼ぶ時、（相手を）じっと見て気付いてもらう

その他：聴者を呼ぶ時、その他の方法を使用する

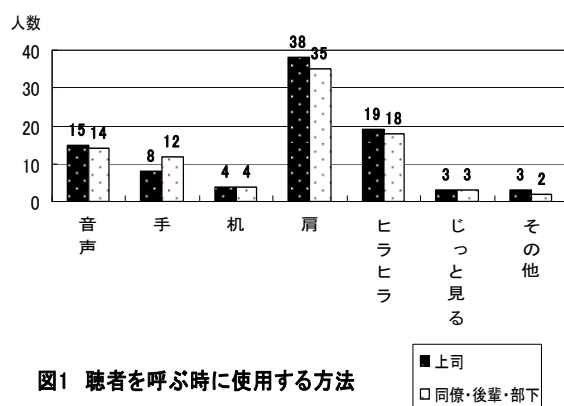


図1 聴者を呼ぶ時に使用する方法

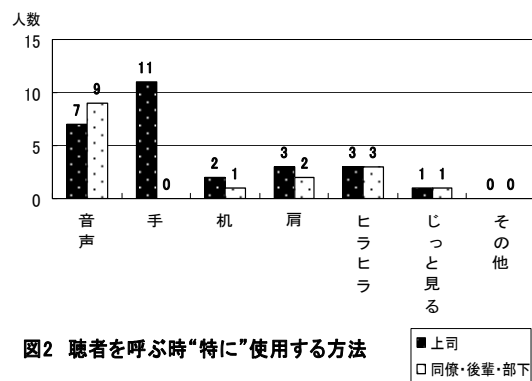


図2 聴者を呼ぶ時“特に”使用する方法

表3 聴者とは違う行動様式

項目	人数
「電気を点滅させて注目を集める」	39
「床の振動を利用して人を呼ぶ」	29
「拍手の仕方が違う」	25
「その他」	16

ろう者が、聴者とは違う行動様式として挙げたものは表3のものであった。これらはろう者が共通して使用することの多い、聴者とは違う行動様式だということがいえる。

IV まとめ

調査の結果、ろう者のどのような行為が聴者から注意や誤解を受けやすいか、ろう者はどのようなことに困るか、また、口形の似ている言葉には何があるか、ろう者の行動様式としてみなせるものとは何かを、数値で示すことができた。また、「ノックは聞こえる人のための行動だと思う」等のろう者の意見や思いも明らかにすることができた。これらの結果をろう者・聴者の両者が知ること、今までの自分の行動を振り返ったり、相手の行動や気持ちを理解したりすることができると思われる。これは口形の似ている言葉を例に挙げると、互いが口形の似ている（読み取り間違いをしやすい）言葉を知っておくことで、その言葉を使用する際には互いが確認をし合ったり筆談を併用したりするなど、確実に伝わるような方法を取ることができるようになると思われる。

なお、この結果は現在社会で働いているろう者や聴者だけに止まらず、これから社会に出る聾学校の児童生徒たちにもフィードバックをすることで、子ども達に「社会に出た時、何が自分に必要か」等の情報として具体的に伝えることができると考える。

互いが「ろう者からの要求を待ただけ・ろう者が聴者に合わせるのが当たり前」、「聴者が酒配慮してくれる・理解してくれるのが当たり前」という考え方では歩み寄れない。互いの立場に立って気持ちを考え、対立しない意思の伝え方で、歩み寄っていくべきである。

文献

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構（2000）

「聴覚障害者と働く（障害者雇用マニュアルコミック版3）」

神田和幸（2000）ろう文化を考える。ろう文化現代思想編集部編。青土社。Pp69－75。